(財)日本少年野球連盟磐田支部

代　　表　福重　俊二
部 員 数　24名
創 立 年　平成19年

磐田ボーイズ、創部３年目で、悲願の全国大会初出場を決めた。

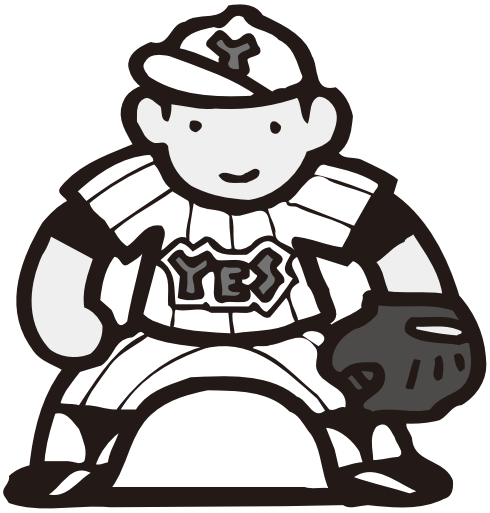
平成21年３月25日、大阪で行われたボーイズリーグ春の全国大会「第39回日本少年野球春季大会」（報知新聞社主催）に、創部３年目の磐田ボーイズが悲願の出場を果たした。残念ながら１回戦、埼玉県のオール春日部に延長戦の末敗退したものの、ハツラツとしたプレーにスタンドからは惜しみない拍手が送られた。この全国大会を決めた静岡県大会では、決勝戦で、一昨年全国ベスト４に入り、全国大会の常連チーム、フレイムズ浜松ボーイズを４－０で降し、準決勝では、やはり全国大会経験のある強豪、富士ボーイズに３－０と、準決勝、決勝を通じて得点を与えない堅守が、一部の新聞に、優勝候補の一角とまで書かした。投手陣は、準決勝で、ショートで主将の江間（４回）とサード、ショートで副将の福重（３回）のノーヒット、ノーランリレー。決勝ではエース和久田が巧みな投球で７回を投げきり完封する。野手陣は、俊足を生かしてホームを落とし入れるライトで好手の副将、鈴木。２度もファインプレーでピンチを救った二塁手の渥美。強肩の捕手、山本と大場。179cm、80kgの大砲、彦坂。ここ一番に打撃でチームを盛り上げる金子、戸塚、中尾、島。さらには、チームワークと元気さでも常に対戦相手を圧倒する。大きな掛け声と共に全力疾走と笑顔での攻守交替。ミスや凡打に終わったチームメイトに、「切り替えろ、皆で取り返してやる。」と、次へのプレーに集中させる姿。終始、磐田ボーイズの選手の声が対戦相手を圧倒して球場内に響く。これが、磐田ボーイズの神髄である。

磐田大会で優勝した磐田BYに賞状を読み上げる杉山会長

磐田といえば、サッカーのイメージが強い。全国大会の会場で、「磐田といえば、ジュビロの磐田？」と、声を掛けられた。その磐田ボーイズは、磐田の野球関係者の『磐田から甲子園に』という願いから、磐田市体育協会の後押しで２年前に創部した。今回全国大会の切符を手に入れた選手（１期生16名、２期生８名）の合言葉は、いつも『全国大会制覇』。内藤監督（静岡学園－東洋大－ヤマハ）の下、厳しい練習に耐えてきた。選手達はとにかくよく走った。砂浜でタイヤを引きながらのダッシュ、ダンベルを持っての持久走。巧みに走りを中心とした体力トレーニングが１年を通して取り入れられた。勿論、基本の習得にも余念が無い。ファインプレーは要らない。キャッチボール、バッティングの徹底した基本練習には時間を掛けた。この単純な練習の中でチームメイト同士を競わせ、そのポイントで、練習試合のスターティングメンバーを決めることもあった。こうして走、攻、守バランスの取れたチームに育った。１年目は静岡ジュニア大会で優勝。２年目、新人戦で準優勝。３年目、全国大会出場、その後の春の県大会でも優勝。岐阜で行われる第19回都府県

対抗大会の静岡県選抜チームには、磐田ボーイズから８名の主力選手を送る。

　磐田ボーイズ出身の選手が甲子園で活躍する日は、それ程遠くはないだろう。

始球式をする杉山会長
杉山旗争奪（磐田大会）

磐田ボーイズ（全国大会を決めた静岡県予選にて）